

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第3回 目の前で自宅が炎に包まれて

やまざし みちこ
山岸 美智子さん 昭和9年生まれ

私は仕立て屋を営んでいた両親と姉、生まれたばかりの弟と、東京の麻布で暮らしていましたが、戦争が激しくなり、いつ空襲があるか分からないということで、仕事の父と姉を東京の家に残し、母と弟とともに千葉県の一宮にある母の実家に疎開することになりました。

昭和20年3月10日の東京大空襲の時は、夜中、東京の方向の空が炎で真っ赤に染まっているのを、一宮から不安な気持ちで見っていました。この時、麻布にあった私の家は無事でしたが、いつまた空襲があるか分からないため、一度様子を見て来ようということになり、5月に私たちは東京に戻ったのです。

様子を見に戻った自宅で焼夷弾に襲われる

その晩のことでした。ラジオから警戒警報が流れ、私と母、姉、弟は、その日家に泊まっていた親戚とともに、急いで家を飛び出しました。警防団に入っていた父は、避難誘導や消火活動を行うため、留守にしていました。

ところが、いくらも行かないうちに、姉が忘れ物をしたから戻る言うのです。「早く、早く」。気持ちが焦って仕方ない私は、家の中に入っていった姉を、足踏みをしながら待ちました。そして、ようやく姉が家から出てきて、私たちが再び走り出したその時です。焼夷弾が我が家を直撃しました。振り返ると、さっきまで私たちがいた家は炎に包まれていました。

夢中で逃げ回った私たちは、夜が明けたころ寺の境内に



山岸美智子さん(右から3番目)とその家族(昭和14年頃)

たどり着きました。そこには、近所に住んでいた友達のまこと君と彼のお母さん、弟の姿もありました。

父とも合流でき、安心したのもつかの間、父はまこと君を連れて、どこかへ行ってしまいました。

後から聞いた話だと、父はまこと君を、黒焦げになって男か女かも分からなくなった遺体のもとへ連れて行ったそうです。その遺体は父と一緒に警防団の活動をしていた、まこと君のお父さんでした。遺体のおなかの辺りに腹巻きの一部がわずかに焼け残っていて、その布の柄を見たまこと君は「これは私の父です」と答えたそうです。まこと君は当時中学2年生。お父さんの遺体と対面した時、どんな気持ちだったろうと思うと、今でも切ない気持ちになります。

自宅を失った私たちは翌日、今度は父と姉も一緒に一宮へ向かいました。そして、そこで終戦を迎えると、その後もしばらく東京に戻ることはなく農業をして暮らしました。

父も母も農業をするのは初めてで大変苦労しましたが、近所の人たちが親切にしてくれたのが本当にうれしかったです。

戦争によって、多くの人が人生を狂わされました。私たちも戦争がなければ、東京の家に住み続け、慣れない農作業に苦労することもなかったのに。まこと君だってお父さんを亡くさないで済んだのに。そう思うと、戦争には絶対反対です。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和6年10月15日号 No.1517



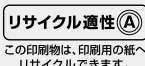
成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です

*本紙は10月3日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

10月31日はハロウィーンです。欧米では子どもがお化けや魔女に仮装して近所の家を訪れ「トリック・オア・トリート」と言ってお菓子をもらうイベントですが、秋の収穫を祝う意味もあるといわれています。そして、家に飾るのに欠かせないのが、カボチャで作る「ジャック・オー・ランタン」。くりぬいて作るのが本格的ですが、シールなどで目や口を貼り付けて、ハロウィーンを楽しんだ後は、おいしく食べるのもいいですね。



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。